暁 鐘 の 音　NO.32

（かねのね）　秋田大学教職大学院 2024.11.29

はじめに

第 32 号では、「秋の思い出」をはじめ、今年度の「全県指導主事会議」「惟蕗の会」「教員採用試験」「課題実地研究」といった、様々なテーマについての原稿を頂戴しました。どうかお楽しみください。

思い出の駅伝大会

教職実践専攻（教職大学院）
特別教授　加藤　勝則

昭和 57 年入学の数研は 39 名の大所帯で、物好き遊び好きの集まりだった。パソコンもネットもない時代、酒を飲んだり、麻雀をしたり…、休日には海水浴やなべっこに出かけた。また、バレーボールやバドミントン、テニスなど合宿と言ってはどこかの運動施設で練習に励み（？）、数研気合組の名で全学の球技大会に出場するのが一つの楽しみだった。４年生の秋、駅伝大会に参加しようということになった。当時の駅伝大会は、大学の正門から仁別国民の森まで、最低でも２ｋｍはある往復 10 区間で争う大会だった。私はバスケットボール部に所属していたが、日頃体を動かしていない者にとっては、酷な大会である。必死に抗う仲間を説得し（私ではありません）、大会の１ヶ月ほど前から練習が始まった。最初は数百メートル走ってギブアップする者も。「高地トレーニングやるぞ」という誰かの呼びかけに「コーチって誰呼ぶ？」という始末。優勝が至上命令の体研、毎年上位入賞の硬式テニス部などが強敵で、その他運動系の団体、医学部や鉱山学部のチームなど、30 チームくらいが参加していた。私が任せられた区間は、最長の第７区。下り坂が多いとは言え 7.8ｋｍもの距離を走るのは、この時が最初で最後である。

大会当日は、紅葉がまぶしい見事な秋晴れだった。８位くらいでたすきを受けただろうか。前方に目標となる選手が程よい間隔でいて、追い抜く快感を味わいながら走り続けた。ランナーズハイという言葉は知らなかったが、そんな感覚だった。伴走者は、原付のスクーターで後ろを走っていた。カセットテープレコーダーから山下久美子の「赤道こまちドキッ」が何度もリピートされる。振動によるものなのか、電池がなくなってきたのか、時折狂うリズムにもめげず、必死に走り続け２位でたすきを渡すことができた。結果は体研に次ぐ準優勝と大健闘。おまけに区間賞もいただいた。奮発して千両寿司で行った祝勝会、大いに盛り上がり乾いた体にビールが沁みた。毎年この時期になれば思い出す格別の思い出である。

秋の思い出「キノコ採り名人　現れる！」

教職実践専攻（教職大学院）
特別教授　千葉　圭子

私の父は、山菜採りを何よりの楽しみにしていました。春には、ワラビやゼンマイ、タケノコなどを採りに、秋には、キノコを採りに山に行きました。今でも思い出されるのは、マイタケを採ってきたときの父の喜びようです。マイタケをそっと抱きかかえて家の中に入って来ると、家族全員を呼び寄せて、マイタケ様を座敷の中心に鎮座させ、その周りを踊ってみせたのです。まさしく、舞茸。あのときの光景と天然舞茸の香りは未だに私の脳裏に焼き付いています。私が小学生になると一緒に山に連れて行ってもらえるようになりました。山に行くと空気が美味しく、ひっそりと咲く野草も美しく、野ウサギやリス、時々ヘビにも会うことがありました。カッパを着て、長靴を履いて、ぬかるんだ道を歩きます。ヒルにかまれることも、蜂に刺されることもありましたが、山は、私にとって、わくわくするワンダーランドのようでした。父も自分の好きな場所（山）で、娘と一緒に山菜を採ることはとても嬉しい時間のようで、いつも優しく微笑み、白い歯を見せていました。何度も連れて行ってもらうと、目が慣れてきて、草も木も関係なく、山菜のみが目に入るようになってきます。父はそれを「圭子も山の目になった。」と言って褒めてくれました。

中学校に入ると部活もあり、一緒に山に行くことはなくなりました。漆の木にかぶれてしまったことも要因だったかもしれません。その後、高校に入学して、秋になった頃、学年の太平山登山がありました。１年の生徒全員と先生方が一緒に太平山を登るのです。みんなが山を必死で登り、疲れ果てた状況で下山する中、私は、発見してしまったのです。キノコの群生地を。山の目が起動したのです。種類は、サワモタシ。味噌汁にすると最高にうまいキノコです。当然、誰も気が付いていません。意を決して声に出しました。「先生、キノコを発見しました！」私の指す方向に周りのみんなが目を向けました。先生が「よし、今井（旧姓）について、みんなでキノコ狩りをしよう」とおっしゃってくださったこともあり、私がキノコの場所を教えたり、採り方を教えたり、最後には味噌汁の作り方までの伝授しました。次の日の学年通信のタイトルは「キノコ採り名人　現れる！」学年通信を見て、父がマイタケを採ったときのように大喜びしてくれたのを今でも覚えています。大切な秋の思い出です。

秋の思い出のあれこれ

学校マネジメントコース
現職院生１年次　高橋　政樹

夏休みが終わると、前期後半（２学期）が始まります。校種や学校によって、学校行事やイベントは違いますが、秋にはワクワクすることがたくさんあります。一小学校教員の秋の思い出について語らせていただきます。

１　「食欲の秋」なべっこ会

地域によって様々だと思いますが、秋田県の県南部では、秋の味覚として「芋の子汁」があります。この「芋の子汁」を学校行事として作るのが、なべっこ会です。多くの学校では、縦割り班での活動になります。この日の子どもたちの表情がとても素敵なのです。下級生の面倒を見ながら、リーダーシップを発揮する高学年の子どもたちの姿が頼もしいのです。子どもたちの思いがこもった芋の子汁は、味はどうあれ、とってもおいしく感じるのです。

２　「芸術の秋」学習発表会

それぞれの学年のカラーが出る学習発表会。私は、台本のほんの一部しか考えません。台本のほとんどを考えることで、子どもたちは主体的に取り組みます。グループごとにそれぞれの場面を創るのですが、子ども同士がもめることもしばしばです。苦労して台本を考えているとき、真剣に練習をしているとき、全力で発表をしているとき、発表後の満足感いっぱいの顔をしているとき、そんな子どもたちを見ることが、私は大好きなのです。

３　「勉強の秋」研究会

秋になると、たくさんの研究会があります。研究主任をしていたとき、市の公開研究会がありました。このときの研究会は、全員授業。研究主任としての役割がありながら、自分の授業の準備をしなければなりません。「自分では無理なのでは」と思ったり、あまりの忙しさに泣きたくなったりしました。でも、何とかなりました。研究会が終わったとき、「研究主任、やっててよかったぁ」という成就感と満足感でいっぱいでした。全職員が一丸となり、「チーム学校」で取り組んだからこそ、この気持ちを味わうことができたのだと、仲間に心から感謝した瞬間でした。

知

学校マネジメントコース
現職院生１年次　鎌田　勉

入学式がつい先日のように感じるが、もう 11 月。この原稿依頼を受け考えたが、４月の全県指導主事会議の事は、少々遠すぎる。悩ましい。ただ、せっかくの機会をいただいたので、その時の学び（生徒指導・社会科教育）について、書いてみようと思う。

令和６年度の生徒指導上の課題と指導の重点について

各課・教育委員会、教育事務所において、県の教育行政施策の重点、生徒指導関連の重点項目についての理解及び共有が図られた。県政運営の指針である「～大変革の時代～新秋田元気創造プラ

ン」については、その理念を受けて本県の教育が進められていることを改めて確認することができた。

次にスクールカウンセラー及びスクールソーシャルワーカーの活用時間の増加について、予算との兼ね合いで苦慮していることが共有された。相談できる生徒は手を差し伸べ支援できるが、相談すらできない生徒の中に困りごとを抱えて悩む生徒がいる。その生徒に寄り添い支援するためには、学校全体で行う発達支持的生徒指導は、有効なのではないかと思う。

「学校教育の指針　令和６年度の重点」を踏まえた今年度の社会科指導

本年度の重点を踏まえた指導の在り方について協議された事項を、各校訪問時に情報提供したり指導に生かしたりしていることを知った。丁寧な協議により方向性の一致が図られ、本県の社会科教育が学年・校種を問わず一貫して実施できることに繋がっていることを理解した。

高校教育課からは、資料を基に根拠をもって議論を深める授業が見られる一方で、問いの立て方や資料の提示の仕方に課題が見える授業もあるとの指摘があった。今後、組織的な授業改善を進める体制づくりに生かしたいと思う。

我々現場の教員は、指導主事の仕事を知らなすぎる。会議で、各々が一言一句に力を込め、魂の報告をしている姿を目の当たりにして、自身の至らなさや覚悟の無さを痛感し、身が引き締まる思いであった。

自身のことを考えるに、五十にして天命を知るどころか、惑いっぱなしの教職大学院生活である。しかし、温かく教え導いてくださる先生方と、若い感性で刺激を与えてくれるストレートマスターの皆さんのおかげで、なんとか頑張っている。そして何より、笑い合い励まし合い、時に挫けそうになりながらも、共に歩んでくれる現職の仲間たちに支えられながら、毎日の学びを深められていることに感謝を示しつつ、筆を置きたいと思う。

あきた惟蕗の会納涼祭の感想

発達教育・特別支援教育コース
学部卒院生２年次　伊東　大樹

令和６年８月９日（金）に令和６年度秋田大学教職大学院あきた惟蕗の会納涼祭が開催されました。この納涼祭は言い換えると、秋田大学教職大学院の同窓会です。場所は、大学会館研修室（学食がある建物の２階）で行いました。県内外から６０名を超える方々が参加してくださりました。私は、納涼祭の企画や運営に携わりました。今回の納涼祭を成功させるために、実は大きく２つの作戦を立てていました。

作戦①　高級焼肉弁当

従来の秋田大学教職大学院での飲み会では、オードブルを注文し、それぞれの参加者が好きな料理を自由に取って食べる形式でした。今回の納涼祭では、一人一人にカルビと牛タン焼肉弁当を用意しました。一人一人に高級焼肉弁当を用意した理由は、フードロスを減らすためです。実際に納涼祭では、食べ残しが少なく、作戦大成功となりました。SDGｓに基づいた納涼祭となりました。

作戦②　多彩なドリンク

日本酒、ビール、ワイン、ノンアル、ソフトドリンクなど、様々な種類のドリンクを用意しました。納涼祭直前に注文していたお酒が届かないハプニングで気持ちが焦りましたが、真夏の暑い日にキンキンに冷えたドリンクを飲むことができました。最高でした。

最後に、納涼祭では学校現場で働かれている修了生の方々からお話を伺うことで、教職大学院在学中にやれることには積極的に挑戦したいという

気持ちが高まりました。修了生の皆さんは口を揃えて、「やりたいことは今のうちに」と仰っていました。学校現場には学校現場の大変さや良さがあり、教職大学院には教職大学院の大変さや良さがあるということに改めて気づくことができました。残り少ない大学院生活では、教職大学院の特徴である理論と実践を往還できる環境に感謝して、学ぶことを思い切り楽しんでいきたいです。

教員採用試験の思い出

カリキュラム・授業開発コース
学部卒院生２年次　熊谷　魁

はじめに

この度、秋田県教員採用試験において高等学校保健体育科に合格しました。私としては、「思い出」と言えるほど教員採用試験の記憶は風化しておらず、今でも鮮明に思い出せるくらいには大きな出来事であります。教員採用試験を語るにおいて、大学院での経験は切っても切れない関係です。今回は、私の教員採用試験について語らせていただければと思います。よろしくお願いします。

私の大学院生活

私の大学院生活は、授業、インターンシップ、部活（陸上競技）、アルバイトそして教員採用試験と、自分で言うには大変恐縮ですが１日フリーの日が無いような多事多忙な日々を過ごしています。その中でも、教員採用試験の存在はその他活動の最中も常に頭の片隅にあり、私の生活に適度なストレスを与えてくれる存在でもありました。また、大学院に進学してもなお部活を続けている理由として、良い成績を残せたら教員採用試験でも優遇されるのではないかと一縷の希望を込めて続けていました。結果的に、今年度は全国６位という結果と共に、教員採用試験のフラストレーションを解消する非常に良い機会になっていたなと思います。

本年度の教員採用試験

本年度の高校体育の倍率は約 17 倍でした。比較的高倍率である試験を合格できたのは、頼れる人が多くいたことに他なりません。教授や現職院生の方々、インターンシップ先の先生方は自分よりはるかに知識や経験をもっています。聞けることは聞いて、すぐ実践できたことが功を奏し、合格に結びついたと感じています。また、同志がいたことも非常に心強く感じました。昨年は１人で孤独に対策を行なっていましたが、今年は自主ゼミを通して活気あふれる学部生、頼れる M1 の後輩と共に対策を行うことができました。多くの人と機会に恵まれたと自負しています。

模擬授業の板書計画

最後に

来年度からは高校教諭として教壇に立つことになります。教員採用試験での経験は、ただの試験対策ではなく、教壇に立ってからも役立つものであると信じています。（そうであって欲しい！）拙い文章で大変恐縮ですが、お付き合い頂きありがとうございました。

課題実地研修の思い出

カリキュラム・授業開発コース
学部卒院生１年次　近江衿香

我々教職大学院生は、課題実地研修として 9 月 26 日（木）、9 月 27 日（金）の 2 日間で男鹿市を訪問しました。1 日目は男鹿海洋高校、風と海の学校あきた、男鹿水族館、2 日目は男鹿南中学校、船川第一小学校、男鹿市教育委員会を訪れ、お話を伺いました。

今回の研修に参加する前、私は男鹿について、観光資源や水産資源が豊富で、ジオパークという男鹿ならではの教育資源が存在する、とても魅力的な地域という印象を抱いていました。しかし、それが教育にどう結びついているのかについては考えたことがありませんでした。そのため、男鹿にある豊かな地域資源が学校教育の中でどのように活用されているのかを学べることに、大きな期待を抱きつつ研修に臨みました。

私にとって特に印象深かったのは、男鹿海洋高校の訪問です。私は普通科高校出身であり、実業高校の授業がどのようなものなのか想像がつかなかったため、訪問をとても楽しみにしていました。同校では、海洋科と食品科学科の授業を参観しました。海洋科では、海に出た際に必須となるロープの加工技術を学ぶ実践的な内容の授業が行われていました。食品科学科では、今まで商品価値がないとされてきたサワラやシイラを加工して商品化し、価値を生み出そうとするプロジェクトが進められていました。どちらの授業も地域の素材をテーマとした内容であったため、一人一人の生徒が真剣な面持ちで授業に取り組んでいる姿が印象的でした。

また、男鹿南中学校の訪問も大変参考になりました。男鹿南中学校では、「男鹿南ぐろおがる」と題したふるさとキャリア教育が実施されており、男鹿市の空き家の再利用などといった現実的な課題をテーマとして扱っていました。同校での授業参観は、私の地元でどのような地域資源を活かせるのか考えさせられるきっかけとなりました。次回帰省した際には、地域を巡りながらふるさとキャリア教育について深く考えてみたいと思います。

今回の研修を通して、男鹿の魅力を様々な側面から発見することができました。また、先生方や院生同士の親睦も深まり、大変有意義な研修になったと感じています。来年の課題実地研修も楽しみです。

男鹿海洋高校でのロープ加工体験の様子

結びに

この度は、暁鐘の音第 32 号をご覧いただき、ありがとうございます。今回の 32 号では、「秋」という季節に関して、また、今年度の様々な行事・活動に関しての原稿を依頼させていただきました。今年度は残りわずかですが、学びや研究に勤しみつつ、最後まで皆様が笑顔で過ごすことができるように祈っております。

暁鐘の音 第 32 号 編集担当 渡部　温子

今後の行事予定

2025年　　1月　21日（火）研究成果事前発表会

2月　　6日（木）実践研究報告書 提出日

14日（金）
15日（土）教師力高度化フォーラム